

一般法規 4

授業内容・授業計画

| | |
|------------|----------------------|
| 1 ～ 2 時間目 | 社会のルール、法体系、民法(全体・能力) |
| 3 ～ 4 時間目 | 民法(法人・意思表示) |
| 5 ～ 6 時間目 | 民法(代理・時効) |
| 7 ～ 8 時間目 | 民法(物権・担保物権) |
| 9 ～ 10 時間目 | 民法(債権) |

民法 総則 意思表示

法律行為

- 法律行為・・・「**意思表示**」が基本的要素
＝法律関係を変化させる一連の行為
法律行為には、私たちの自由な意思に基づくことが大切
 - 自由な意思 = **真正な意思** = 本当の気持
 - 「意思」 = 思っていること
 - 「表示」 = やっていること
- 「意思表示」はあったが、それが本心に基づくものなのか
- 「意思」と「表示」が不一致の場合は有効か？

意思表示の構造

- 動機

バイクに乗って学校に通いたい

意思表示以前の事情

- 効果意思

店に行き、甲というバイクを買おうと思った

- 表示意思

店の人に甲を買いますと言おうと決めた

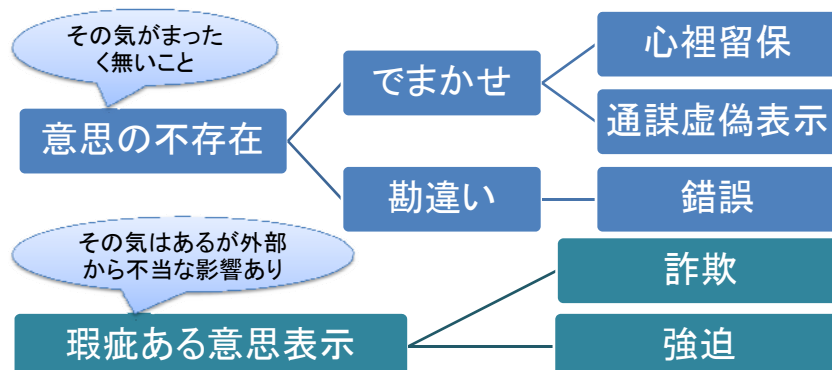
- 表示行為

店の人に「あの甲というバイクを欲しい」と言った

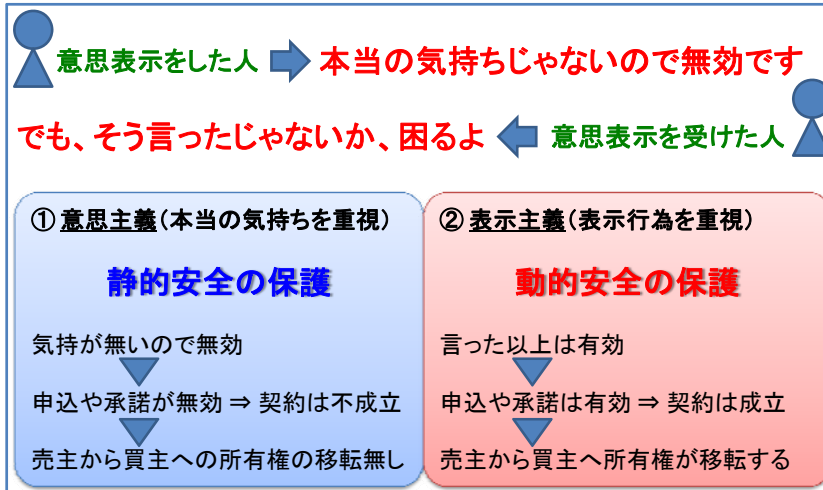
意思表示の構成要素

意思と表示の不一致の形態

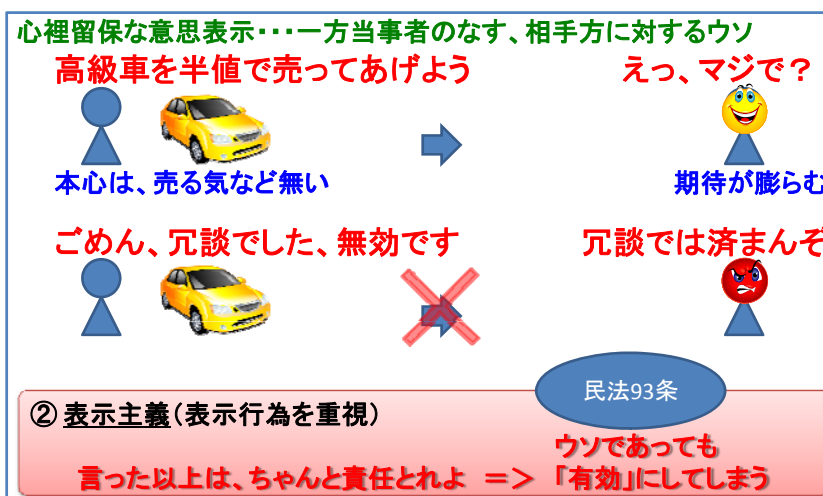
実際には、何らかの事情で本当の気持ちと表示内容との間に不一致が生ずる



不一致の場合の処理方法



心裡留保(しんりりゅうほ) 1



心裡留保(しんりりゅうほ)2

心裡留保な意思表示・・・一方当事者のなす、相手方に対するウソ

高級車を半値で売ってあげよう ま～たコイツ言ってるよ

本心は、売る気など無い



ウソに気づいてうんざり



1億円の高級車を1円で売るよ



普通、ありえんでしょ



あほか

気づかないお前が悪い

民法93条ただし書き

例外的に

相手方が「悪意」または「過失」が有る場合は「無効」として扱う

通謀虚偽表示(つうぼうきよぎひょうじ)

通謀虚偽表示・・・相手方と示し合わせてするウソの意思表示

頼むから私の土地をあなたに売ったことにしてください



借金地獄

申込 → 承諾



私が買ったことに
しておきましょう

「有効」の場合 ⇒ 契約成立 ⇒ 土地所有権は移転 ⇒ 財産隠しが成功！

正義に反するので、これはマズい

①意思主義(本当の気持ちを重視)

民法94条

本当は売る気や買う気が無い => 「無効」にしてしまう

権利外観法理(けんりがいかんほうり)

★民法や商法の根底に流れる基本的な考え方

以下の3点が全て備わっていたら、外観どおりの権利関係を認める
つまり、見たままのとおり、「Cに所有権が移る」ことを認める！

①虚偽の外観

通謀虚偽表示な意思表示

(その気がないのに土地の登記名義A→Bに移す)

外から見ると、Bに所有権があるように見えること

②相手方の信頼

Cは善意 = 「AB間の契約は無効」を知らない

その土地がBのものだと信じて、土地を買ったこと

③真の権利者の帰責性

真の権利者=A … 真の所有者はA

帰責性=A … ウソついて不当に免れようなんていうAが悪い

第三者とは何か

通謀虚偽表示 … 原則として「無効」

善意の第三者が出てきた場合は「有効」

- 善意……ある事実について知らないこと
- 第三者……その表示の目的物につき、新たな法律上の利害関係
を取得した者

Aは土地をBに売却したように装い、Bがその土地に建物を建てた



この場合、Cは第三者にあたるか？

頑張った人は得をする



第三者に無過失・登記が必要か

心理留保の例外……契約は無効で、相手方は保護されない

相手方が悪意または有過失(ウソをついている)ことを知っていたか、当然気づくはずだった場合

通謀虚偽表示の場合……保護要件は、相手方の帰責性の大小で決まる

Cには、「二重登記の事実を知らなかった」という落ち度は無いのか？



Cさんに勝ってほしい場合 = Aの帰責性が大きい(悪いことしたのはAだ)

Aさんに勝ってほしい場合 = Aの帰責性が小さい(Cの保護要件を厳しく)

この場合、Aが悪い奴なら、Cに過失があっても保護される(Cの無過失は不要)

転得者(A-B→C→D)の場合

C: 善意、D: 悪意の場合……通説は「絶対的構成」という立場

Cは善意だから保護されるが、Dまで保護するに値しないのだが…？



相対的構成…その人ごとに保護するかしないかを考える

絶対的構成…善意者があると、そこから先は善意でも悪意でも保護する

Dを保護しないと、善意のCを保護した意味がなくなってしまう場合がある



転得者(A-B→C→D)の場合

C: 悪意、D: 善意の場合……権利外観法理の3要件を考えてみる

Dは第四者にあたるが、善意の第三者として保護されるだろうか…？



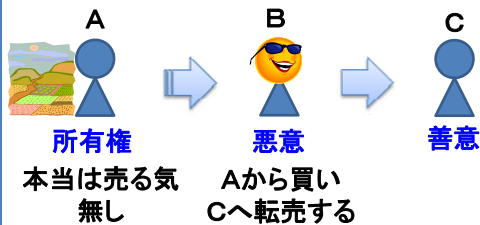
権利外観法理の3要件

- ①虚偽の外観…Cが所有者っぽい(Cの登記名義になっているから)
- ②相手方の信頼…Dは善意なのでクリア
- ③真の権利者の帰責性…真の権利者はAなので帰責性がある

3要件をすべて満たしており、転得者Dも第三者として保護する

通謀虚偽表示ない場合 (94条2項の類推適用)

例1) 心裡留保



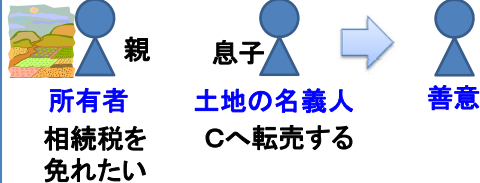
問題1

例1と例2について、Cは保護されるか？

問題2

例1でBが勝手に書類を偽造して、不動産をB名義にしたときもCは保護されるか？

例2) 特に意思表示なし



錯誤(さくご)

- **錯誤**・・・表意者が法律行為の要素につき**勘違い**をして**意思表示**を行った場合のこと
- **錯誤の取り扱い**・・・本当の気持ちが無いので「無効」
取消し権者が取消権を行使して初めて、法律行為の効果を消滅させることができる

(復習) 動機は**意思表示**の構成要素ではない

- ① 動機
- ② 効果意思
- ③ 表示意思
- ④ 表示行為

★ 動機に錯誤があっても無効にはならない

意思表示の構成要素になる

錯誤(さくご)無効の要件

意思表示に
錯誤がある

要素の錯誤
であること

表意者に重過
失がないこと

3つの要件が全てそろった時に初めて、
意思表示が無効として認められる

第1要件 意思表示に錯誤がある

動機 バイクで学校に通うほうが、電車で通うより早いはず



店でバイクを買った… 一文無しになった…

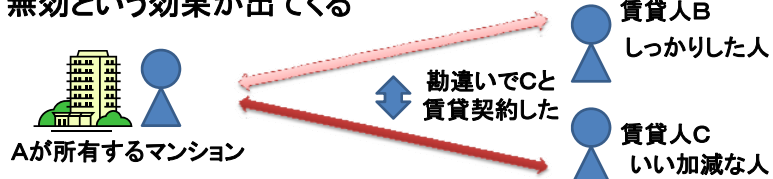
現実 電車で学校に通うほうが、バイクより断然、早かった

問題 「売買契約を無効にして、金を返してほしい」はOKか?

第2要件 要素に錯誤がある

要素とは… 「重要な事項」という意味

つまり、**重要な事項**について**勘違い**があった場合に初めて無効という効果が出てくる



貸す相手が誰かは……「**重要な事項**」にあたる

理由……「**継続的契約**」だから ⇔ 「**一回的契約**」
(売買契約など)

買主に関する錯誤は、要素の錯誤にはならない

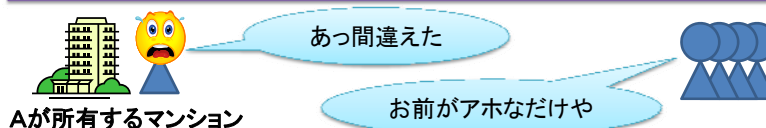
第3要件 重大な過失がないこと

意思表示する人(表意者)に**重大な過失**がないこと

重大な過失があると、無効にはならない

注意していれば、普通はそんな勘違いをするはずがない

大チョンボした人(不注意が非常に大きい場合)まで
面倒を見てあげる必要はない！



錯誤無効の主張は誰でもできるか

(復習)

取消しの主張ができる・・・制限行為能力者側だけ
相手方はできない

(大原則)

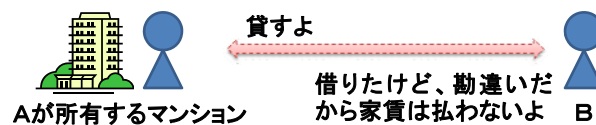
無効の主張ができる・・・誰でもできる
本人でなくても可

しかし、
錯誤無効の主張ができるのは表意者だけ、できる

錯誤無効の主張は誰でもできるか

表意者だけが無効を主張することができる、とは・・・

Aが勘違いして、Bに対して意思表示した



勘違いなので、AがBに対して意思表示は**無効**

A: 貸すと言ったけど、無効にします ⇒ OK

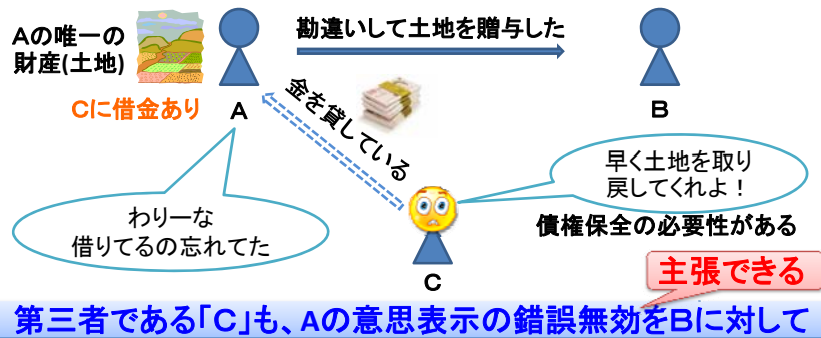
B: あなたは勘違いしているから、無効ですよ ⇒ NG

「錯誤」は、表意者「A」を保護するための制度

錯誤無効の主張は誰でもできるか

例外要件(表意者以外の者も無効を主張できる)とは...

- ① 第三者に債権保全の必要があり、かつ
- ② 表意者が意思表示の瑕疵を認めている、場合



詐欺・脅迫

だまされて、脅されて...意思表示したらどうなるか

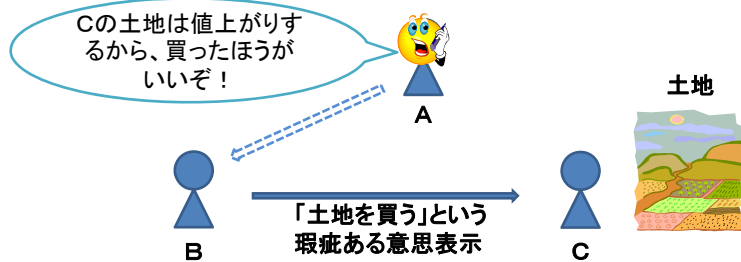


「買う」という意思表示する過程に不当な影響がある

いちおうBの意思表示を有効とするが、取り消すこともできる

第三者の詐欺

第三者(A)の詐欺・・・意思表示の当事者はBとC



Bは、Cに対して行った意思表示を取り消すことができるか

Bの言い分

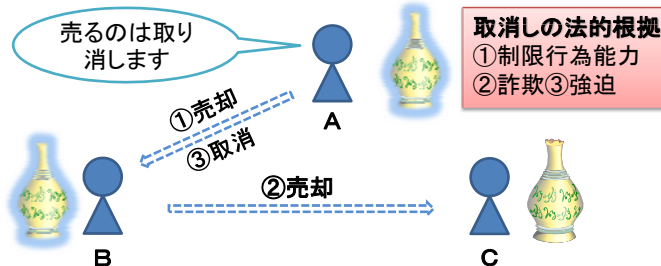
「すみません、Aにだまされたんです・・・悪いですけど、取り消させてください」

Cの言い分

「文句があるならAに言ってください。勝手に取り消されても困るんですよ。」

取消しの遡及効(そきゅうこう)

取消しと第三者・・・どこまでさかのぼることができるか



取消しの法的根拠

- ①制限行為能力
- ②詐欺③強迫

壺がCに行ってしまうからでも取り消せばAに戻ってくるか

取消しの遡及効＝さかのぼって及ぶ効力

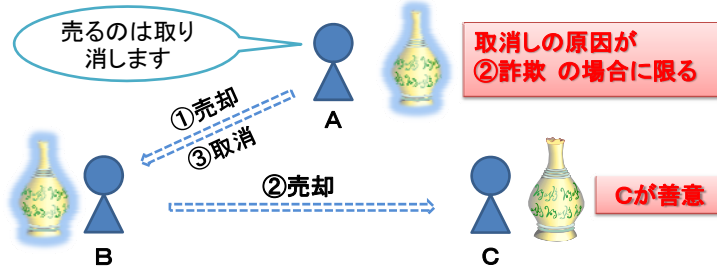
「A」に取消権が認められる場合 ⇒ もともとAからBへの壺の売却はなかった

すると、

Cは所有者でないBから壺を買ったことになり、所有権を取得できない(原則論)

取消しの遡及効の例外

2つの要件が必要・・・Cが壺を返さなくてもよい場合とは？

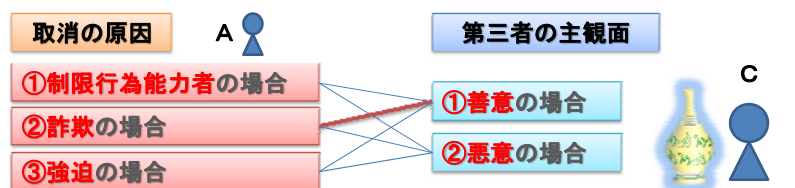


問題

この場合の「善意」とは、どういうことか？

2つの要件が揃った場合、例外的にCは壺を返さなくてよい（保護される）

取消しと第三者保護の一般論



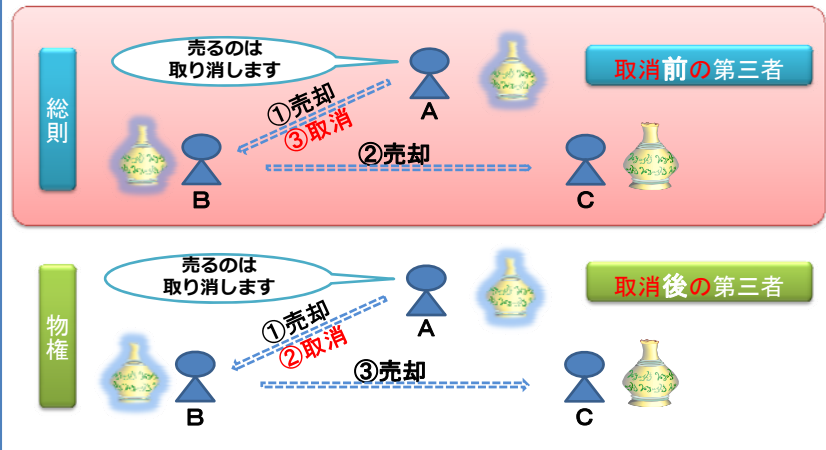
全部で6通りあるが・・・うち5通りはAを保護する
Cに所有権が来るのは「詐欺」取消でCが「善意」の場合のみ

善意の第三者を犠牲にしてまでも保護する場合がある！

これが民法の考え方だ

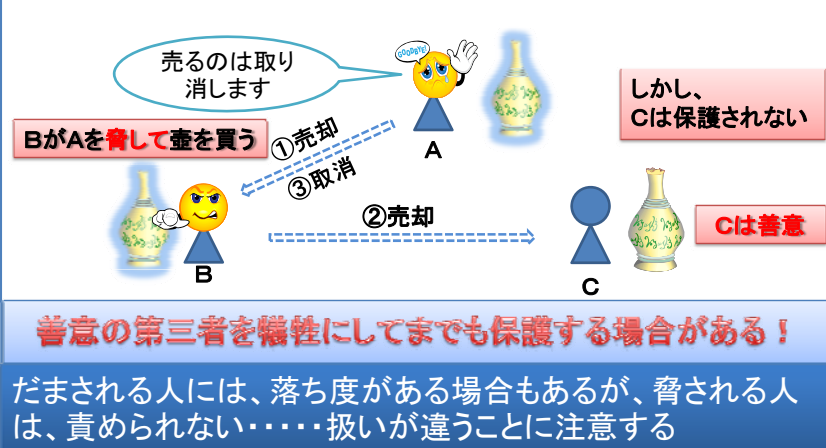
取消しの遡及効

遡及効により権利を奪われる者・・・取消前に利害関係を持つに至った者

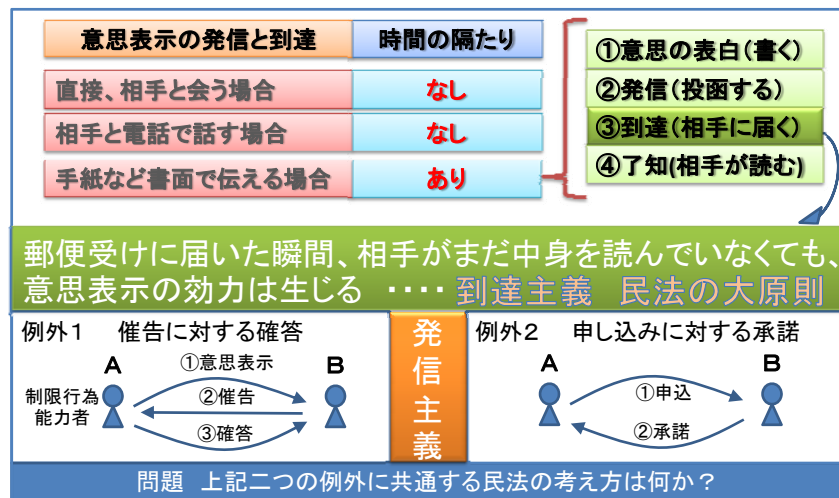


強迫（きょうはく）

脅された人は・・・常に取消ができる

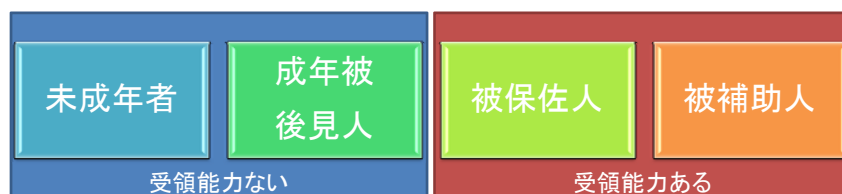


意思表示 到達主義の原則



受領(じゅりょう)能力

相手からの意思表示を受領することができる資格



これらの人に何らかの意思表示をしても、効力は生じない